

受賞者の業績



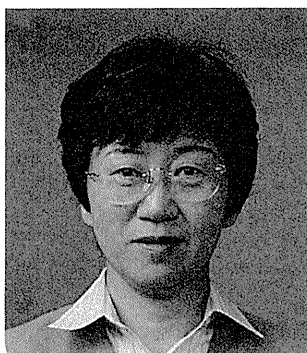
片桐 清一 51歳 (医師・青森県)

産婦人科の一般診療に従事するかたわら、昭和61年より、高校生のための性教育等、地域における健康講話を積極的に実施。また、思春期の少女のために、青森労災病院産婦人科外来に県内で初めての思春期婦人科外来を開設すると、19歳以下の少女の受診者が急増し、少女たちの悩みの解消に努めている。さらに、妊婦対象の母親教室などの講師として地域の母子保健の向上に寄与している。



渋谷 得江 50歳 (保健婦・宮城県)

昭和48年より名取市に奉職。乳幼児健診における脳性マヒの早期発見と早期療育による障害児支援活動に取り組む。同57年からは、幼児社会化促進事業として「わんぱく教室」「ちびっこ教室」を実施し、子育て中の母親の支援に努めた。また平成4年からは児童・思春期相談に携わり、いじめ不登校などについて学校や関係機関とのネットワークづくりを推進し、心の健康づくり事業に尽力した。



最林寺 優子 52歳 (保健婦・山形県)

昭和44年より白鷹町役場に奉職。乳児家庭訪問事業を積極的に実施。日中の育児の約半数が祖父母であることに着目し、同61年から、おばあちゃん学級を開催し一貫した育児方針づくりの場として成果を上げた。「丈夫で心豊かな子どもを産み育てる母親運動」として福祉等との連携を図って啓発活動を行っている。さらに子どものむし歯半減対策に取り組むなど、地域の実情に則した活動で大きな成果を上げている。



森 島 直 哉 54歳 (医師・栃木県)

昭和51年より日光市の森島小児科医院に勤務し、同53年からは院長として診療を行いながら、住民と行政のパイプ役として地域の母子保健の向上を目指して提言し、自ら実施している。同54年からは、子どもの健全育成、疾病の早期発見に向けて乳幼児健康診査の充実を図り、地域の医療体制づくりに尽力した。その結果、関係機関との連携が強化された。現在なお、乳幼児の継続した健康管理体制づくりの充実に向け、その中心として活躍を続けている。



鈴 木 せい子 51歳 (助産婦・群馬県)

太田市の保健婦を経て、昭和53年、足利赤十字病院に助産婦として勤務し、母乳育児指導と自然分娩の普及に尽力した。同58年、助産院開業と同時に、「母乳育児を考え広める会」の活動に積極的に取り組み、母乳育児の推進に寄与した。また、地域の母子保健事業の推進に向けて、助産婦が地域の専門職として活動できるよう、(社)群馬県助産婦会の再建と体制づくりに意欲的にかかわり、成果を上げている。



福井ステファニー 40歳 (民間ボランティア・東京都)

昭和61年、自らの体験をもとにグループミーティング、電話相談など乳児を亡くした家族への支援活動を開始。平成4年には医師の協力を得て「乳幼児突然死症候群家族の会」の設立に貢献し、会長として活躍している。SIDSによってわが子を亡くした遺族の自助グループとして、全国に活動の輪を広げた。また、諸外国の情報を収集しての予防活動、遺族ボランティアの養成などに尽力し多大な成果を上げている。



平 林 外美代 51歳 (保健婦・石川県)

昭和45年より小松市に奉職。母子の一貫した管理システムの構築に取り組み、管理カードの作成、データ管理システムの整備などに尽力した。同53年、4か月児健康相談を創設、医療機関と連携し、障害や疾患の早期発見、早期療育を目的に相談体制づくりに貢献した。平成4年から若年者の健康教育を目的としたヤングペアレントフット事業を実施し、同6年から従来の母親教室を両親学級として定着させた。



山 田 ミチ子 51歳 (保健婦・福井県)

昭和45年より三方町に奉職。町独自の乳幼児の定期健診を充実・定着させ、同60年、発達診断に重点をおき、乳幼児健診の充実に尽力した。平成元年、母子の遊び場として「すくすく学級」を開催、その後、地区ごとに学級を開催して住民の自主組織へとつなげた。一貫した母子保健活動の推進を目的に保健連絡会を開催し、広い視野で地域保健向上に貢献している。



中 嶋 登美子 43歳 (保健婦・山梨県)

高根町役場を経て、昭和56年より武川村に奉職。妊婦教室等の定例開催、定着化に取り組み、母子保健事業の基盤整備に力を尽くした。同56年から愛育組織の育成に取り組み、組織を再編成し、地域と母子のかかわりを強化するために「声かけ訪問」など、多彩な活動を展開している。平成7年より「子どもにやさしい街づくり事業」に取り組み、推進会議の開催、通信の発行など、積極的な活動を行っている。



上 野 孝 美 52歳 (助産婦・京都府)

昭和44年より京都桂病院に勤務。約30年間、施設内助産婦として活躍し約7,000人の出産に立ち会う。平成5年に府下の高校生の性意識と実態の調査・分析を行い、母子保健上の課題を提起し活動の必要性を具体化させた。施設内の保健活動にとらわれず、広い視野と連携の中で青少年の健全育成のためのネットワークづくりに尽力した。現在、妊産婦の保健指導や相談にあたり、第一線の活動を続けている。



十 楽 忍 52歳 (保健婦・広島県)

高校養護教諭、東広島市勤務を経て、昭和51年より本郷町に奉職。母親学級を定期的に開催し、独自の内容で妊産婦死亡率および乳児死亡率、低体重児出生率の低下に貢献した。母子保健推進員の育成指導に力を注ぎ、同62年、新生児全戸訪問を開始し、育児相談、乳児健診へと連動させた。住民主体の親子教室を実施するなど、卓越した渉外能力、指導力で母子保健ネットワークの基礎づくりに寄与した。



小川 貞子 54歳 (保健婦・鹿児島県)

昭和44年、「健康で丈夫な子を産み育てよう」をスローガンに「太陽の子運動」を展開し、地域に密着した母子保健活動の推進に寄与した。また10年間のへき地・離島をもつ保健所勤務では乳幼児、妊産婦、低体重児等の訪問活動を推進した。さらに、「太陽の子運動推進員」として母子保健推進員の育成にも力を注ぎ、妊娠中からの継続的な母子の歯科保健活動にも積極的に取り組んでいる。



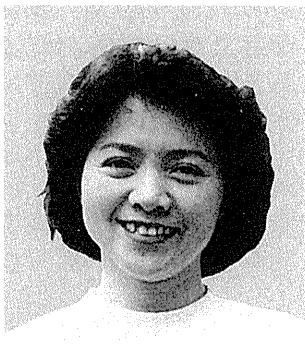
小林 千代 51歳 (保健婦・神戸市)

神戸市中央病院勤務を経て、昭和52年より神戸市保健所で乳幼児訪問を徹底し、異常の早期発見、早期受診に努めた。また血友病の幼児をもつ親を定期訪問し、助言指導に努めるなど、地域の母子保健に尽力した。さらに、阪神大震災において、迅速で積極的な救援活動を行い、3年経過した今日でも心理的な影響が残っているなか、家庭訪問を実施し、育児不安の解消に寄与している。



垣田 淳子 54歳 (助産婦・福岡市)

昭和51年より福岡市中央保健所に勤務し、福岡市乳幼児健診に関する集計システムの改正に尽力した。同63年、働く女性とその夫を対象にマタニティスクールを計画、実施。平成3年、実務担当者として乳幼児健診実施マニュアル作成に寄与した。同6年より育児支援ネットワークづくりに携わり、育児不安の解消、虐待防止に努め、同9年、虐待防止研究会に参加。虐待の早期発見・対応に努めている。



藤澤 普子 44歳 (幼稚園教諭・大田区)

障害をもつ子どもの親として、平成2年、「大田区ダウン症児を育てる親の会」の結成に尽力した。同年、障害児のための早期教育プログラム、ポータル大田支部を開設し、同6年から家庭教育学級を開始した。講演会などを通じて情報提供を行い、家庭での早期療育の必要性の具体的指導を始め、現在、親の会では情報の交換、母親のメンタルケアなど幅広く活動し、親の援助に寄与している。